

無職転生の小話

stellar—destiny

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよっとした小ネタを思いつき次第、本筋と矛盾しない範囲で書いていくものになります。

目次

自転車	1
禁欲	5
青	9

自転車

自転車。

それは俺やナナホシがいた世界においては必要不可欠なものであった。歩くには遠い距離でも関係なかった。これ一つで何処へでも行けた。

だが今世においては、自転車の影も形もない。

ロキシーも通勤の際には、アルマジロのジローに乗る。

ペダルを漕ぐ事に縁がないのだ。

だからこそ乗り回したかった。そんな思いから、俺は土魔術で自転車を作った。

大まかな構造は把握していたし、人形制作ではもつと複雑な事もしていた。

とはいえ素人だ。

流石にタイヤの中身には明るくなかったので、形だけの再現にとどめた。

何はともあれ完成だ。早速乗り回す…と、言いたいところだが問題が発生した。

そんな深刻な事ではなく、俺の心情的な問題だ。

寂しいのだ。

どうせなら誰かと一緒に、この喜びを分かち合いたい。

俺は愛しい人に声をかけた。

「一緒に出かけませんか？」と。

「ルデイ、これは何ですか？」

「青春です」

「そうではなく、これは何というものなのですかと聞いているのです」

訝しげに自転車を見ながら彼女は言う。

「ごもつともだ。」

とはいえ、事細かな説明よりも抽象的な事を言いたくなつたのも事実。

だが、実際に説明を求められては答えないわけには行かないだろう。

神に誤魔化しは御法度だ。

「自転車と言つて、ナナホシがいた世界ではメジャーな乗り物です。今日は、ぜひ一緒に乗りたくてロキシーを呼んだのです。」

俺がそう言うのと、ロキシーは「しようがないですね」と顔を赤らめながら答えてくれた。

さて、いよいよ本番だ。

まず俺がサドルを跨ぎ、次にロキシーを後ろに乗せる。

ロキシーも俺に倣つて荷台を跨ぐ。

前世であれば咎められただろうが、今はいいだろう。

「……ど、どうぞ」

俺の腰に腕を回しつつ心の準備ができたことを伝えてくるロキシィ。

やはり緊張していたようだ。

いい、とてもいい。

思い出されるのは子供の頃の事や、二人きりの夜の事。

激しく熱い夜の記憶を呼び起こすだけで、俺のエースがパウロしてしまいそうだ。

「行きますよ、先生ー」

「はい、ルディィー」

気分は最高だった。

憧れの人との自転車の二人乗り。

無職童貞のままでは成し得なかつた快挙だ。

町の人に驚かれはしたが、そんなことは問題ではない。

楽しかった。

俺は青春を乗りこなしている。

「ルディィー」

「はい、ロキシ―！」

楽しいです、とロキシ―の言葉が続き、俺の耳を打った。ならばもつと、とペダルを漕ぐ足の力を強めていく。

腰に回された腕の力が強くなる。

町を何周かしたところで、自転車を止めた。

「どうでしたか？」

「楽しかったですよ。……またお願いしてもいいですか？」

当たり前だった。

ロキシ―の笑顔が見れるのなら、何回でも漕ぐ所存でございませう。

当然、自転車の事は家族皆に知れ渡り、

一人ずつ順番に乗せる事となった。

少しは、パパらしいことができた気がする。

禁欲

添い寝

「……ホントに我慢できる?」

「勿論だよシルフィ。俺を信じてくれ。」

そう言つて、ボクに頭を下げてくるルデイ。

真面目な顔で「相談があるんだ」なんて。

もしかして、ヒトガミの事でまた何かあつたのかなつて思つたのに……。

「約束守れなかつたら、暫くはお預けだからね?」

「ああ、ロキシー神に誓うよ。」

一瞬だけ、ルデイの目が据わつた気がした。

それにしても、ボクと添い寝がしたい、だなんて。

毎日とはいかないまでも、夜は一緒に寝てるのに。

でも、今回は意味が違ふんだつて。

「ベッドに二人で入るとなれば、そういう事だろうというお互いの認識がありました。しかし、たまには性欲抜きでシルフィと寝たい。」

こう言つてルデイはボクを説得した。

なるほど、それなら昼間に呼び出してきた事にも納得できる。

でもルデイの事だし、結局は我慢できなくなりそう。

流石に何日もお預けなんてしないけど。

ボクも辛いしね。

とにかく、せつかくのルデイの頼みなのだから、応えてあげよう。

「わかつたよ。それじゃあ、着替えてくるね。」

一旦寝室を出て、自分の部屋に。

一緒に寝るのだから、ちゃんと準備をしなければ。

下着はこの間買ったもの。

寝間着は、柔らかくて袖のあるものを。

香水をつけるか迷つたけど、今はそういう目的ではないし、やめておく。

「お待たせ、ルデイ。」

寝室に戻る。

ベッドでルデイがこつちを見ていた。

おいで、と両手を広げている。
飛び込む。

ボクを抱きしめる。

ギュツと、力強く。

そのまま、ルデイは寝転がる。

「どう?」

「いい匂いだ。」

「そうじゃなくて、我慢できそう?」

「正直危うい。」

大変だ。

これじゃあ本当にお預けになっちゃう。

このままじゃまずいけど、離れたら意味がないんだよね……

いざとなつたら、エリスみたいに引つ叩いてでも止めようかな。

流石にかわいそうかな。

そんな事を考えていると、ルデイは続けてこう言った。

「危ういけど、耐えてみせるよ。約束は守る。」

少し見上げるようにしてルデイの顔を見る。

この状況に似合わない引き締まった顔をしていた。

うう、やっぱりルデイはカッコイイな。

皆に自慢したくなる。

こうくつついたままだと、ボクの方も我慢できなくなりそう。

「うん。おやすみルデイ。」

「おやすみ、シルフィ。」

約束を破ることなく、昼寝の時間が終わる。

ボクの方が早く起きたので、ルデイを起こしてあげる。

何だか幸せそうな、でも少し苦しそうな寝顔だった。

そして、夜になって。

今日のルデイは、いつもより荒っぽかったな。

中途半端は、良くなかったよね。

青

寝ぼけていた俺の腹に、何かのしかかるのを感じる。

大方、クリスあたりだろう。

いいぞ。

パパは拒まないからな。

愛する娘の為ならば、喜んで枕になってやろうではないか。

「……………」

見下ろすと、想定とは違う光景が広がっていた。

青だ。

青といえばロキシ―の色だ。

次女と三女の色でもあるが、真つ先に浮かぶのはロキシ―の顔。

最も、最近ではかなり似てきていて区別がつかなくなつたこともあるのだが。

だが、神を見間違えるなどあつてはならない。

俺のアイデンティティが崩れてしまう。

間違いない、今俺にくつついて離れないのはロキシ―だ。

ロキシシー
先生だ師匠だ妻だ神だ。

そつと抱き寄せる。

落ち着く。

パウロを喪つた直後のことを思い出す。

あの時の彼女の温かさは忘れられない。

「ん？」

あることに気付く。

何かが違うな、と。

具体的に何が、まではわからないが、違うのだ。

おかしいなと思いつながら、俺はそのままの姿勢でいた。

ふと、ドアが開く。

そこには、ロキシシーが立っていた。

「あれ、ロキシシー？」

俺はロキシシーと寝ていたはずなのに、どうして。

いつの間にトリックベ○トを手に入れたのですか。

「ララは、パパとお昼寝ですか」

にこつと笑つて言う。

ララは、という言葉聞き逃すことはなかった。

俺は自分の過ちに気付く。

娘がニヤニヤしていた。

「パパ、ママと私を間違えたね」

こつちを見るんじゃない。

明らかに狙っただろうに、わざとらしく笑うララに一言言つてやりたいところだが、やめておく。

それよりも大事なことがあるのだ。

「え、ルディ？」

神を見間違えた俺に許されたのは、こうして頭を下げることだけだ。

アイデンティティを守るべく、言葉を発する。

「ごめんなさい。ララとロキシシーを間違えてしまいました。もう二度としませんから、許してください。」

まだ、足りない。

続けて言う。

「それと、間違えた直後に言うのも変ですが、愛しています。ロキシシー」

「私とララは良く似ています。知らない人からは姉妹だと勘違いされるほどです。そこ

まで頭を下げるほどのことではありませんよ。」

「ありがとうございます。」

赤面しながらロキシーは続ける。

「あと、私も愛していますよ。ルデイ」

気が付くと、ララの姿が消えていた。

イタズラが済んで満足したのだろう。

あるいは、俺たちがイチャつき始めたので退散したか。

ともかく、二度とロキシーと娘を見間違えないと心に誓うルデイちゃん（三十路）なのであった。